

Web公開用（抜粋）


はじめに 一本書の内容紹介とガイダンスをかねて

本書の内容と構成

本書は以下の10回の日本特殊教育学会・自主シンポジウムの記録を整理し考察を加えたものである。全てを掲載はできなかったが、大要はお伝えできると信ずる。特にことわりのない場合、本書中のシンポあるいはシンポジウムという用語は下記のいずれか又は双方を指す。

「聴覚障害教育における日本語獲得(習得)支援の実際を踏まえて」(2009～2014；2011を除く)

「聴覚障害教育における言語運用力育成」(2015～2019)

<p>13:00～15:00 22教室</p> <p>自主シンポジウム 2</p> <p>聴覚障害児教育における日本語獲得(習得)支援の実際を踏まえて(その4)</p> <p>—「内省」の観点からみた思春期の課題に迫る言語運用—</p>	<p>【企画趣旨】</p> <p>現在、聴覚に障害を有する児童等の教育方法は、聴覚法からバイリンガル教育まで様々な方法が実践され、その効果が示されている。しかし、各方法の実践が深まる中で、聴覚障害児教育の焦点が、児童等の日本語獲得(習得)であることも次第に明らかになりつつある。</p>	<p>そこで、今回(第4回)は、聴覚障害児の思春期の課題との関わりの中で、言語の問題を「内省」という観点から言語運用面から考察し、社会自立を目指すための実践の在り方も含め、検討を加えたいと思う。</p>
<p>日本特殊教育学会第57回大会(広島大学)</p> <p>9月22日(日)13:30～15:00 教育K棟102</p> <p>自主シンポジウム6-5</p> <p>聴覚障害教育における言語運用力育成(その5)</p>	<p>目的</p> <p>聴覚に障害のある児童生徒(以下、聴障児生)の思春期における言語課題に迫るGood Practiceを多岐にわたって積み上げ、言語運用に影響する要素を考察する。</p>	

第1章は、シンポジウムの出発にあたっての問題意識と10年にわたる歩みを紹介している。

第2章は、シンポジウムの各報告をもとに、話題提供者が原稿を作成した。

第3章は、指定討論の任にあたった4名が、報告に考察や補足を加え論考を展開している。

「言語運用」とは何かをめぐって

作成にあたり「言語能力と言語運用を峻別する」とのChomskyの理論を出発点とした。学説や研究の発展を踏まえての「言語運用」「言語運用力」「言語運用能力」といった関連する用語についても、検討を進め第3章でも言及をしている。その章末には一括して文献も示し参照に供している。しかしながら、限られた時間の中でこれらの用語を確認し整理することは私達の手に残る課題であった。この点については、識者の言と研究の進展を俟つものである。

私達の原点は副題にあるような Good Practice の集成であり、「言語運用」を理論的に深めることを第一の目的としてきたわけではない。議論を重ねる中で、実践を構想したり分析を進めたりするためには、従来の「言葉の力を育てる取組」を踏まえながら「言語運用」の問題に踏み込むことが必要で有益ではないかと考え始めた。この視点を整理したのが、次に示す言語モデルである。

言語モデルの名称とその内容

以下の言語モデルは本書で繰り返し使われ、かつ重要な概念を整理するものである。読者の便宜を

考えてあらかじめお示しする。その意義や内実は第1章と第3章で詳しく触れる。

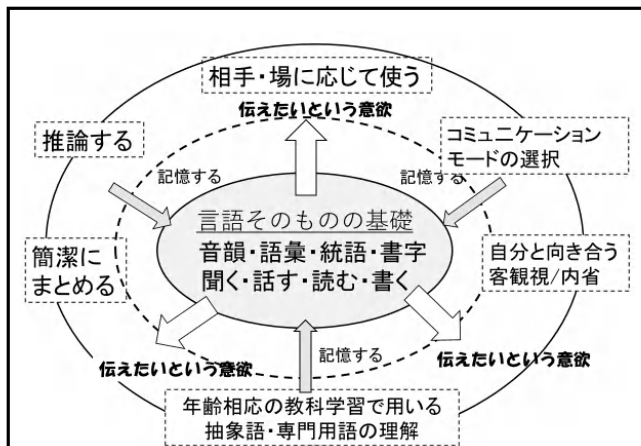


図1 言語運用にかかわる高井モデル

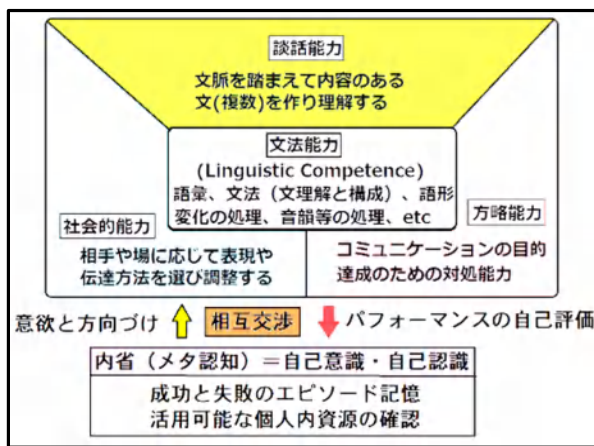


図2 第二言語習得研究を援用した言語運用モデル

本書の作成と送付にあたって

本書の作成にあたって、京都光華女子大学と公益財団法人日本教育公務員弘済会京都支部より助成を受けて発刊することができた。また、聴覚障害教育振興会より奨励賞をいただいたことで、本書を全国の聾学校をはじめとする関係機関に送付できることとなった。ここに記して謝意を表したい。

LaPHICY 聴覚障害教育における「言語運用」を考える会
編者一同